

ISSN 1882-0190

甲南女子大学

英 文 学 研 究

STUDIES IN ENGLISH LITERATURE

Konan Women's University

第 四 十 四 号

Volume 44

(2 0 0 8 年)

甲南女子大学英文学会
Konan Women's University English Literature Society

平成20年3月31日 発行
Issued March 31st, 2008

目 次
Contents

立ち昇る香り——ミルトンの『樂園喪失』における改悛の祈り
..... 倉恒 澄子1

The Incense-Clad Prayers: The Repentance of Adam and Eve in
Milton's *Paradise Lost*
.....KURATSUNE Sumiko

『ルース』にみられるエリザベス・ギヤスケルの教育観
.....越川 菜穂子15

Elizabeth Gaskell's Views of Education Found in *Ruth*
..... KOSHIKAWA Naoko

★ ★ ★

『クリスマス・ストーリーズ』
.....藤本 隆康訳24

Charles Dickens, *Christmas Stories*
..... Tr. By FUJIMOTO Takayasu

立ち昇る香り——ミルトンの『楽園喪失』における

改悛の祈り

The Incense-Clad Prayers: The Repentance of Adam and Eve in Milton's *Paradise Lost*

倉恒 澄子

Sumiko KURATSUNE

1. 序

ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) の長編叙事詩『楽園喪失』 (*Paradise Lost*, 1667, 以下 *PL* と略) では、全 12 巻の終盤に天使ミカエル (Michael) による啓示が繰り広げられている。神のもとから遣わされたミカエルが、墮罪後改悛したアダム (Adam) に対して、その原罪によって子孫である人間たちも腐敗墮落するがいずれ救い主が訪れる、という遠大な歴史を見せてゆく部分である。描写自体が、第 11 巻の後半と、続く最終巻の大半、合わせて 1,000 行を超える長大さであるが、中でも第 11 巻の締めくくりには約 150 行を費やしてノアの洪水のエピソードが置かれている。そして、洪水を生き延びたノア (Noah) が感謝の祈りを捧げ、神が新しい契約のしるしとして虹をかける場面が、それまでの、悪事の続いた人類史の雰囲気を一変する明るい転回部分となっている。

本論では、このノアの祈りとそれに対する神の応答がもたらしたものに注目することによって、ミカエルの啓示がアダムにもたらす効果、さらにはミルトンの *PL* 自体がもたらす効果についても考察する。

2. 洪水

D. C. アレン (D. C. Allen) は、聖書の洪水譚が歴史や科学の発達に応じてどのように解釈されてきたかをたどった著作の中で、*PL* における洪水のエピソードにおいて注目すべき点に、その長さを挙げている。*PL* ではミカエルの啓示において、アダムからキリスト (Christ) へとつながる人類史が繰り広げられるが、その中で、重要人物であるアブラハム (Abraham) やダビデ (David) については 30 行前後、モーセ (Moses) でも 100 行以下という描写に比して、ノアには特別長い 200 行が費やされているというのである。

“The interesting thing about Milton’s account of the Flood is not the subject matter but the length. . . . It may be that Milton found the story of Noah more artistically attractive; and moreover it was always considered one of the best allegorical adumbrations of the life and ministry of Christ. On the other hand, it was, as we have observed, one of the stories of the Old Testament that was most in doubt. This was a sort of special honor it shared with the Creation and the story of Adam and Eve. If I am right in assuming that one reason why Milton wrote *Paradise Lost* was to affirm his belief in these legends, then I think we are justified in suggesting that this was likewise his purpose when he described the Flood at such length and with such careful orthodoxy.” (Allen 154)

ここでアレンもいうように、一般に洪水譚は、死と再生を扱うことから、キリストの生涯と使命の予兆としての意味合いが極めて直接的に明示されるものであるが、同時に、どれほど重要であっても天地創造やアダムとエバ (Eve) の物語と同様、歴史的科学的な妥当性は証明し難い事柄である。ミルトンの *PL* 執筆動機のひとつがこれらの伝承への信仰表明であったならば、洪水をこれほど長くかつ正統的に描いた理由も、それと同様の理由であろう、とアレンは示唆している。*PL* はその冒頭にあるように、アダムとエバの墮落を題材として (“Of man’s first disobedience” *PL* 1.1)、神の摂理を証しその道の正しさを人々に示すことを目指す (“I may assert the eternal providence, / And justify the ways of God to men” *PL* 1.26) という明確な意図のもとに著されている。とすると、その作中での洪水譚の入念な語り直しはどのような意味をもっているのだろうか。

まず、洪水の原因と結果を確認する。聖書での洪水の原因は、「地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い図っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛め」た神が、「彼らのゆえに不法が地に満ちている」ことを厭い、もはや人間だけでなく生き物すべてを地上から拭き去ろうとしたからである (Gen. 6.5-6, 13)。その際ノアと家族たちが死を免れたのは、神が「この世代の中であなただけはわたしに従う人だと、わたしは認めている」からである (Gen. 7.1)。ここでは、不法に満ちた地上を一度すべて浄化することが企図されている。古代オリエント世界には、同根とされる洪水譚をもつ神話が複数存在したが (フォン・ラート 200)、神々間の勢力争いの面もある古代オリエント神話では、罰する神と救う神が異なる場合もあり、罪と罰が必ずしも一元的に対応しているとは言い切れない (フォーサイス 206)。たとえば、紀元前十二世紀頃の成立とされるアッカド語版ギルガメシュ (Gilgamesh) 叙事詩では、エンリル (Enlil) 神が他の神々と図って洪水で人間を滅亡させようとするが、エア (Ea) 神の機転でウトナピシュティム (Ut-napishtim) とその家族が生き延び、そして生存者の存在を知って憤るエンリルに対してエアが、人類全滅という措置は思慮不足だとたしなめている (月本 147, 303)。また、同じアッカド語で、やはり洪水を生き延びたアトラ・ハシース

(Atra-hasis) という賢者の物語では、神々が自分たちの労役を軽減するために人間を造ったものの、その数が増えて騒々しくなったのを嫌い、様々な災厄で人間の滅亡を図るが、その度に他の神からの助力で人間は生き延びている (杉 167-90)。これらに比べると、聖書の洪水譚においては、人間の悪とそれに対する処罰の是非には揺るぎがない。

PL でもミカエルの説明にあるように、神は、腐敗し墮落した人間たちの姿を見て、「心を痛め、深い後悔の念を覚え」、そのような不浄な世界を一新しようとして洪水を起こす (PL 11.886-87)。そして、善人にはどんな報いが、そうでない者にはどんな罰が待っているかをアダムに示すために、ミカエルは具体例として洪水のエピソードを示し始めるのである (“... to show thee what reward / Awaits the good, the rest what punishment; / Which now direct thine eyes and soon behold.” PL 11.709-11)。このように洪水の時点までは、罪を犯せば罰は当然付随してくるはずであった。

ところが、ゲルハルト・フォン・ラート (Gerhard von Rad) も指摘するように、聖書においては、義人であることを貫き通せない人間に対して、この洪水を転機として神の対応の仕方に変化が見られる (フォン・ラート 198)。墮落した世界が洪水で一新された後でも、実は人間がすべて善人となれるわけではなく、なおも彼らが「常に悪いことばかりを心に思い計っている」ことは神も承知の上である。この懲罰に値する理由が洪水の前後で変わっていないにも関わらず、神は、たとえ今後不正を行なう人間があるにせよ、二度と地を呪うことはしないと心に誓うのである。一般に、人間にはなかなか守りきれない旧約の律法を、やがて寛容な愛で成就するのが新約のイエス (Jesus) であるとされるが (Jer. 31.31-32, Matt. 5.17)、少なくとも洪水以後は、人間が善を貫きとおせなくても、そんな人間に対する滅亡という罰はすでに必定とはされなくなっている。

聖書の神は、ノアが祭壇上で焼き尽くした全燔祭の宥めの香りをかいだのち心で語る。人間はそもそも悪事を思ってしまう存在なので、生き物を洪水で全滅させることは二度とすまい、と。その契約のしるしが、空にかかる虹である (Gen. 9.12-17)。

And Noah builded an altar unto Lord; and took of every clean beast, and of every clean fowl, and offered burnt offerings on the altar. And the Lord smelled a sweet savor; and the Lord said in his heart, I will not again curse the ground any more for man's sake; for the imagination of man's heart is evil from his youth: neither will I again smite any more every thing living, as I have done. (Gen. 8.20-21)¹

捧げ物の香りが天へ昇り、神がそれを受け取るという描写は古代オリエントの類縁譚にも存在するが、聖書では虹の契約を新たなモチーフとして、燔祭の儀式、特に神のもとへ立ち昇った香りが、人間の悪事に対する神の方針転換の言葉を引き出す印象的な役割を果たしている。

ノアの洪水は聖書では、「水で前もって表わされた洗礼」として、キリストの受難による人類

救済の原型とみなされている (1 Pet. 3.21)。そして、人々はたとえ苦難に陥っても、虹の約束を想起することで絶望を免れることが可能となる。紀元前六世紀のバビロン捕囚期の作とされる第二イザヤにおいても、「再び地上にノアの洪水を起すことはないとき誓い／今またわたしは誓う／再びあなたを怒り、責めることはない、と」(Isa. 54.9) という神からの言葉を期待することが、逆境を乗り越えて信仰を持続する人々の心の支え、慰撫として詠われている（関根『イザヤ書』 171）。旧約聖書がオリエント神話と異なる点として、正義の唯一神に支えられたイスラエルの民の「救済史」という視点が挙げられるとおりである（Hooke 117; 月本 377）。

PL でも、下記の引用でミカエルがいうように、神は「今ではその怒りを喜んで自ら鎮めておられる」のであり、「墮落した者たちが悉く除かれ、この唯一人の義しき人間が神の御前に大いなる恩寵を見出した今、神もまた人間に対して心を和らげ、再び人類を抹殺しようとは思わず」、二度と洪水で大地を滅ぼすことはしないと明言するくだりが語られる。神と人間との関係が変化し、新たな関係が結ばれたことになる。

So willingly doth God remit his ire,

 ... yet those remove,
 Such grace shall one just man find in his sight,
 That he relents, not to blot out mankind,
 And makes a Covenant never to destroy
 The earth again by flood. . . . (PL 11.885, 889-93)

ただし PL においては、ノアは次のように感謝の祈りを捧げるが、聖書の創世記にあるような燔祭の儀式に関する描写や香りで神が心を宥める描写は描かれていない。

Then with uplifted hands, and eyes devout,
 Grateful to heaven, over his head beholds
 A dewy cloud, and in the cloud a bow
 Conspicuous with three listed colours gay
 Betok'ning peace from God and covenant new. (PL 11.863-67)

3. 立ち昇る祈り

それに代わって、PL では燔祭の供物の香りではなく、神のもとへと立ち昇ったものがある。それがアダムとエバの改悛の「祈り」である。

Thus they in lowliest plight repentant stood
 Praying, for from the mercy-seat above
 Prevenient grace descending had remove
 The stony from their hearts, and made new flesh
 Regenerate grow instead, that sighs now breathed
 Unutterable, which the spirit of prayer
 Inspired, and winged for heaven with speedier flight
 Than loudest oratory: . . . (PL 11.1-8)

この時の二人は墮罪後なので、洪水をも免れた義人ノアとは立場が異なる。しかし、*PL*においては上記のように、この時すでに二人は意識せずして恩寵を受けており、その心から頑なさが取り除かれ、新たな肉体として甦っていたとある。そして、その祈りは「霊」の力を注ぎこまれ、天へと飛び立つ。新約には、たとえ人が祈るべき言葉を知らなくても聖なる霊みずから執り成してくれるというくだりがあるが (Rom 8.26-27)、二人の祈りはまさに霊の力を借りて昇ってゆく。そこには大仰な雄弁という技や、さらには言葉という形すら必要としないと描写されており、彼らの祈りがひとときわ昇華された存在と化しているのがわかる。

道に迷うことなくまっすぐに天の門をくぐった祈りに対して、さらに香りの形容が加わる。すなわち、芳香の立つ黄金の祭壇において、仲裁者たる御子から香りの衣装を着せ掛けられ、神の王座の前へと進むのである。

. . . To heaven their prayers
 Flew up, nor missed the way, by envious winds
 Blown vagabond or frustrate: in they passed
 Dimensionless through heavenly doors; then clad
 With incense, where the golden altar fumed,
 By their great intercessor, came in sight
 Before the Father's throne: them the glad Son
 Presenting, thus to intercede began. (PL 11.14-21)

溜息として発された彼らの祈りは、今では、洪水後に神の心を和らげたあの聖書の燔祭を思わせる「香り」として描かれている。そして御子から「樂園の果樹にも優る実り」として神の前に供えられる描写も加わり、文字どおり全燔祭の捧げ物のように、神の心を和らげる働きを期待されている。

See Father, what first fruits on earth are sprung
 From thy implanted grace in man, these sighs

And prayers, which in this golden censer, mixed
 With incense, I thy priest before thee bring,
 Fruits of more pleasing savour from thy seed
 Sown with contrition in his heart, than those
 Which his own hand manuring all the trees
 Of Paradise could have produced, ere fallen
 From innocence. . . . (PL 11.22-30)

この情景と酷似した描写が、新約のヨハネの黙示録にみられる (Fowler 599)。第七の封印が開かれた時に、すべての聖なる者たちの祈りが、天使のもつ金の香炉からの煙とともに祭壇に献じられ、神の前へ立ち昇る箇所である (Rev. 8.4)。この相似によって歴史の終末と始原とが対照され、アダムとエバの改悛の祈りが燔祭の儀式の原型として、神との応答関係を引き出す働きという大きな意味をもって浮かび上がってくる。黙示録では、正しく行ないを改めている者には楽園の命の木の実を食べる権利が与えられるとされるが (Rev. 2.7, 22.14)、その命の木の実こそ、知恵の木の実の後に人間がさらに食べてしまうのではないかと懸念され、楽園追放の要因となったものであった (Gen. 3.22, PL 11.94)。始原においてアダムとエバの躓きで失われたものが、終末を迎えてようやく回復され、人が神のもとへ戻ることを期待されるのである。

PLの改悛の祈りでは、ギリシア神話に登場する善人デウカリオン (Deucalion) 夫妻との比較もなされている。この夫妻も人類一掃の洪水を生き延び、その後に神託を求めて祈ったが、アダムとエバの祈りはそれにも劣らぬ真摯で重々しいものだったと描かれる。

. . . yet their [i.e. Adam and Eve's] port
 Not of mean suitors, nor important less
 Seemed their petition, than when the ancient pair
 In fables old, less ancient yet than these,
 Deucalion and chaste Pyrrha to restore
 The race of mankind drowned, before the shrine
 Of Themis stood devout. . . . (PL 11.8-14)

ただしミルトンは、二人と比べるのにノア夫妻ではなく敢えて異教のギリシア神話から例を選んでおり、しかも、それはノアより伝承としての古さにおいても劣るとの付言を加えて、余計な価値が加わるのを制している。その結果、PLにおけるアダムとエバの祈りの役割は新鮮な独自性を保つことができ、同時に、創世記の記述中では初の全燔祭というノアの行ないの意義を損なうことも回避している。

PLに燔祭の描写が一切ないわけではなく、ミカエルの啓示の中でも、犠牲の供物を認められ

たアベル (Abel) と、認められなかったカイン (Cain) のエピソードが、聖書にはない祭壇の描写を加えて語られている (PL 11.432-43)。しかしそこでは祭壇に香をかける表現はあるが、それが立ち昇ってゆく表現はなく、天から承認の光と煙が下る描写で儀式は終わっている。また、墮落の直前に二人が行なった朝の祈りでは、曙光を受けた樂園で、大いなる祭壇としての大地から万物が声なき賛美を上げ、それが芳香として神の鼻孔を満たす中、それにアダムとエバが崇敬の声を唱和させていた (PL 9.192-99)。それは万物が一体となつての荘厳な礼拝場面だが、視点は、それを覗き見ている第三者サタン (Satan) から導かれたもので、描写には間接的な隔たりが存在した。一方、改悛の場面では、二人の祈りはそれ自体が芳しい捧げ物として天に到達し、さらに擬人化され意思を持つかのように神と対面するその様子が、臨場感豊かに逐一描かれている。この、天へと上昇した芳香が神の前に捧げられるという情景描写は、PLにおいてはアダムとエバの祈りのために、他での使用を控えて効果的に用意されていると考えられる。

4. 契約

本来、聖書において、神が人間と最初に契約を結ぶのはノアに対してであるとされる。² その際、創世記では、洪水後にノアが祭壇を築いて燔祭を捧げ、そして心をやわらげた神が虹の契約を示した。一方 PL でのノアは、洪水後に感謝のしるしに天に手を伸ばすという動作は記されるが、燔祭の描写はないままに契約の虹へと場面が移る。³ 代わりに、PLにおいてはアダムとエバの改悛の祈りの場面で、先のような燔祭を思わせる描写がはさまされている。天へと香りが上昇してそれが神の前で吟味され寛大な措置へとつながるといふ過程は、神と人との関係の結び直しを生き生きと見せることのできる要素であるが、PLにおいては、これがノアの時代を待たずに前倒しされて、この改悛の祈りが神と人との新たな関係の前触れとなっている。⁴ つまり、PLにおいては、神が人間の悪を承知した上で救済の約束を結び直すという状況は、ノアを待つまでもなく、始祖アダムとエバに対してもすでに当てはまりうるのである。聖書とは違って PL では、神が人間の墮落を予見していることは明かされている (PL 3.93-96)。墮落のみならず、御子による犠牲、そして一挙に最後の審判後の世界再生までが、実際に誘惑の始まる前からすべて明示されている (PL 3.227-65)。アダムたちには不確定な未来でも、作中には、過ちのある人間にも救済が考慮されているという希望が確固として存在する。

PLにおいては、人間からの祈りとそれに応えて結びつきを強める神という応答関係が早期から語られている。神が自分の似姿として人間を造ったのは、「人間を神のパートナーとして、つまり呼べば応える応答関係をもち得る相手として創造した」ということだ、と大島はいう (大島 31)。実際、ラファエル (Raphael) は墮罪前のアダムに対して、理性をもって神と交わることができる存在としてアダムが創造されたのだ、と告げている。

... a creature who not prone

And brute as other creatures, but endued
 With sanctity of reason, might erect
 His stature, and upright with front serene
 Govern the rest, self-knowing, and from thence
 Magnanimous to correspond with heaven, (*PL* 7.506-11)

このような交わりの重視は、神と人との間に限られるものではない。アダムも自分と同等なもの、理性的な楽しみをともに味わうのにふさわしい交わりを求めてエバの創造を願い、そして叶えられたのだった。

Among unequals what society
 Can sort, what harmony or true delight?
 Which must be mutual, in proportion due
 Given and received; . . .

 . . . of fellowship I speak
 Such as I seek, fit to participate
 All rational delight, wherein the brute
 Cannot be human consort; . . . (*PL* 8.383-86, 389-92)

ミルトンは『離婚論』(*The Doctrine and Discipline of Divorce*, 1643)においても、夫妻の間に快適な語らい (“cherful [*sic*] conversation”) が成立することを求めたが (*CPW* 2.328)、その前提にはこのような神と人間の応答関係の重視がある。⁵

アダムの祈りは神のもとに届く。ミルトンにおいては神の恩寵は人間の意思よりも先行するとみなされるので (*PL* 3.173-75)、アダムが素直に心を改めて祈っているのも、前述のように神の恩寵が働いていたからだとされるが、偽りのない改悛の祈りは御子の執り成しを得て、神の心に確かに働きかける力をもっていたとみえる。そのため、祈りを受け取った神は人間の元へミカエルを遣わす際に、彼らを脅かすことなく慰めを与え、しかもいずれ救い主を通じて与えられる新しい契約のことも忘れず話すように、という配慮を指示して送り出すのである (*PL* 11.108-17)。

このような経緯で訪れたミカエルは、アダムに対してまず、二人の祈りが聞き届けられたこと、そして、即座に下されるはずであった「死」の手がその力を奪われてしまったことを告げた。それでもなお追放処分を知って嘆く二人に、神がどこにでも遍在していることを教えて元気づける。彼は二人に「そのことを信じてもらい、これについて確固たる信念をもってもらうために」 (“Which that thou mayst believe, and be confirmed,” *PL* 11.355)、啓示を行なう。このよう

に、ミカエルの来訪は、単にアダムとエバの追放を完遂するためだけの行為ではなく、神の意思を二人に明らかにする (reveal) するための行為でもある。この啓示 (revelation) が、二人に慰めを与えて生きる希望を見出させるのである。

この啓示の効果は如実に表われる。すなわちアダムは、墮落した地上にあっても将来ノアが虹の契約を得られることを知って大きな喜びを覚え、蘇生感を味わっている (PL 11.868-69)。またエバも夢の中の教えで、いずれすべてが御子によって回復されることを知ったことから、今や、その慰めを心に抱いて躊躇うことなく樂園を去ることができることと語る (PL 12.620)。いずれも、救済の約束を知って慰めを得ることにより、信仰が確固たるものにされたのである (Fowler 615)。ミカエルは、啓示を通してアダムが可能な限り最高の知識と知恵を得たと認めている (PL 12.559, 576)。それは知識の木の実を禁忌に反して勝手に食べることで得られなかった、心揺らぐことなく安らかに生きてゆくための知識・知恵である。このように、祈りに答えて慰めが与えられ、その内なる慰めが信仰を保つ鍵とされている。この慰めとそれによる信仰の強化を必要としていたのは、アダムとエバだけではなからう。

5. 慰め

ミルトンは、宗教面では聖書を重視するプロテスタントの立場からイングランドの教会改革を唱え、政治面では在野でそして 1649-60 年は政府のラテン語担当秘書官としていわば「Cromwell 政府のスポークスマン」(武村 38) ともいべき重責を果たしながら、イングランドの共和制を必死に支持しようとしていた。しかしその共和政府は混乱に陥った挙句、1660 年チャールズ二世 (Charles II) の即位により王政復古を迎える。クリストファー・ヒル (Christopher Hill) は、PL 執筆開始とされる 1658 年にはすでにミルトンにとって革命の不首尾は明確に意識されていたはずだと注目している。ただし、神の大義を掲げた革命が失敗に陥っても、ヒルもいうように、ミルトンは PL のサタンや『闘士サムソン』(Samson Agonistes, 1671) における再生前のサムソン (Samson) のような、神を責める立場には与しなかった (Hill 347-53)。彼は共和制末期に至っても精力的に文書の発表を重ね、文字どおり命がけで人々に理想の回復、理念の護持を訴え続けている (新井・野呂 498)。神を責めれば、サタンたちのように自らは絶望に陥ることになる。過つのが常である人間の、その過ちに目を向け、そして正しい信念をもって行動できる個人を希求する方向へと進むならば、将来への希望は維持できる。F. T. プリンズ (F. T. Prince) にあるように、神の正しさを証明するには希望ある将来の像が必要とされるものである (Prince 235)。ミルトンは『キリスト教教義論』(De Doctrina Christiana, 1655 頃執筆) において、希望の源は信仰にありそれは結果と原因の関係だ、と述べているが (CPW 6.476)、逆にいうと、希望を持ち続けるためにも、信仰は強固で揺るぎない存在であってもらわねばならない。ミルトンは自分の『英国史』(The History of Britain, 1670) において、ウィ

リアム (William I) によるイングランド征服までの時代を扱っており、その最後で、自国民に落ち度があれば異国人が指導者として迎えられてしまうこともある事実を読者への警告としている。そしてその際、悪人もしばし栄えることがあるように、善人も逆境を耐えねばならないことがあるのは、神の定めることである、という表現を借用して、境遇に左右されない忍耐を説いている (CPW 5.403)。

アダムがミカエルから慰めの効用の説明を受けた経緯は、啓示でキリストの受難と復活による救済を知ったものの、そのキリストが昇天した後は地上に置き去りに残された信徒が迫害を受けるのではないかということ案じて尋ねたからであった (PL 12.479-84)。それに対してミカエルはこう教える。天から慰め (Comforter) が送られて、それが聖霊 (Spirit) として彼らの内に住み、愛に基づく信仰の律法で導いてくれるならば、この慰め自体が償いとなりまた支えとなるので、どんな迫害を受けてもそれに負けることがないのである、と。

... but from heaven
 He to his own a Comforter will send,
 The promise of the Father, who shall dwell
 His Spirit within them, and the law of faith
 Working through love, upon their hearts shall write,
 To guide them in all truth, and also arm
 With spiritual armour, able to resist
 Satan's assaults, and quench his fiery darts,
 What man can do against them, not afraid,
 Though to the death, against such cruelties
 With inward consolations recompensed,
 And of supported so as shall amaze
 Their proudest persecutors: ... (PL 12.485-97)

不信の徒の群れの中に残された少数の信仰の徒、という構図は、王政復古期のミルトン自身にも通ずるものである。たとえ逆境にあっても、契約に代表される救済の約束、神との応答関係が、慰めとなり、人を導いてくれるのであるならば、ミルトンもまさに PL という作品を介してその行程をたどっている。すなわち、ミカエルの啓示、言い換えれば「真の知識」によってアダムが内なる慰めを得て信仰を堅固にしたように、ミルトンは、自ら PL という作品を「啓示」として著し提示することによって、自身を含めた人々を慰め、信仰を強めようとしている。作品冒頭に“Of man's first disobedience”を題材として“justify the ways of God to men”することを目指すと言明したとおりである。さらにミルトンは、PL の洪水の場面で、一時的にせよ、啓示の語り手／慰めであるミカエルに取って代わって語り始める。彼はアダムに向かって直接

こう呼びかける。

How didst thou grieve thou, Adam, to behold
 The end of all thy offspring, end so sad,
 Depopulation; thee another flood,
 Of tears and sorrow a flood thee also drowned,
 And sunk thee as thy sons; till gently reared
 By the angel, on thy feet thou stoodst at last,
 Though comfortless, as when a father mourns
 His children, all in view destroyed at once;
 And scarce to the angel utterdst thus thy plaint. (PL 11.754-62)

ここで描写される、自身の子孫の滅亡を目の当たりにするアダムの悲歎は、自らの政治的業績の崩壊を目の当たりにするミルトンの立場にも無縁ではないが、ミカエルはアダムに——すなわち作者ミルトンは自身を含む読者に——滅びる側にも徳の欠如という落ち度があることを説いて聞かせる (PL 11.787-839)。勝ち誇る勝者も真の徳を欠いていれば腐敗し内部抗争に陥るし、敗者も自由を失うとともに徳まで失って無難な安逸に溺れる。勝者であれ敗者であれ、戦時であれ平時であれ、正しい道を歩み続けるのは困難である、と説いた後、それをなした稀有な人物としてミカエルはノアを挙げて啓示を進めるのである。

ミルトンが作中に登場するのはここだけではない。特に、第1巻、3巻、7巻そして9巻のそれぞれ冒頭の *invocation* で、彼は詩神に助力を願う中で自らを語っているが、その際、記述の内容にあわせて自身が空高くへ、あるいは深い地獄へと飛び回る描写をしている。それは、著名な『イーリアス』(*The Iliad*)、『アエネーイス』(*The Aeneid*) などの古典、あるいは時代が下がった『オルランド狂乱』(*Orlando Furioso*, 1516) などの英雄譚の巻頭 *invocation* と比べても、ひとときわダイナミックで具体的である (ホメーロス 10; ウェルギリウス 10-11; アリオスト 1)。中でも第7巻の *invocation* では、詩神ウラニア (Urania) への祈りの中で、ミルトンは自身が天にまで上昇した様子を描いている。

... whose voice divine
 Following, above the Olympian hill I soar,

 ... Up led by thee
 Into the heav'n of heav'ns I have presumed,
 An earthly guest, and drawn empyreal air,
 Thy tempering; with like safety guided down
 Return me to my native element:

Lest from this flying steed unreined (as once
 Bellerophon, though from a lower clime),
 Dismounted, on the Aleian field I fall
 Erroneous, there to wander and forlorn. (PL 7.2-3, 12-20)

天上での戦いが主な題材であったそれまでの巻から、後半はアダムとエバの誘惑へと主題が移るため、ちょうど中間に当たるこの箇所、詩人の筆も天上から無事に降下できるよう祈るのは当然の流れである。しかし天上の世界への訪問者という立場は、アダムとエバの改悛の「祈り」に重なる。迷うことなく上昇した祈りとは異なり、詩人は道を見失ったり誤って墜落したりすることのないよう案じているが、神との交わりへの希求は共通している。PL を介して希望、慰めを語ることによって、信仰を堅固にすることを期するという点にも、祈りとの大きな相似形がみられる。

ミルトンは『教会統治の理由』(*The Reason of Church Government*, 1642) の中で、ユダヤの歴史家フラウィウス・ヨセフス (Flavius Josephus, 37?-98?) が『ユダヤ古代誌』(*Antiquitates Judaicae*, 95?) の序言で指摘した、民衆教化の効果的な方法に賛同を示している (CPW 1.747)。すなわち、モーセが同胞に律法を制定しようとした際、いきなり律法そのものを押し付けるのではなく、まず創世記から語り始めた点である。人々にまず、神が全被造物に創造の恵みを与えたこと、さらにユダヤ民族に対しては格別の慈しみを与えていることを知らせることで、彼らが神に服従する正当な理由を知り、神への心からの服従を決意することができるようにする。これにより、人々は恐怖や慣習からではなく、自らの意思で、しかも喜びをもって神への服従を選び取ることができる、というわけである。作品としての PL にもまさにこれと同様の効果をみることができる。政治パンフレットならぬ、生き生きとした物語仕立てで語られるこの作品を通じて人々は、神の意思を誤って解釈した場合の恐怖を追体験し、そして改悛した者に対して与えられる寛大な恩寵を知る。ミルトンは PL を介して聖書／神意の「正しい」解釈を語り直すことで、慰めとそれによる信仰の強化をめざし、そして可能な場合にはミルトン自身が、読者のための、そして自身のための祈りとなり慰めとなって、天上へと立ち昇り、また地上をめぐる、仲介と堅信に努めているのである。

注

1. 英文での聖書からの引用は *King James Version*、和文での引用は新共同訳聖書による。また PL の訳に関しては平井訳を基に、必要に応じて若干の改変を行なった。
2. 本論では、ミルトンの死後に系統立てて研究され始めた ヤハウエ文書 (J) や祭司文書 (P) という文献的区別は、特に必要がない限り重視しないこととする。ちなみに、洪水後のエピソードにおいて契約という語が用いられているのは P (Gen. 9.1-17) である。J においては契約という語は使われていないが、ノアの燔祭による「宥めの香り」をかいで神が御心を和らげるといふ、応答の因果関係は明確である。一方、燔祭については、すべての祭儀は Moses

時代に神の啓示によって始まるとみならずPでは、儀式的な描写は避けられており、Pでのノアは燔祭を捧げない(フレイザー 78; 関根『創世記』 166)。

3. ただしミルトンはノアの燔祭自体を否定していたわけではなく、箱舟に入れる生き物に七つがいつといつという、燔祭を考慮に入れた描写を入れている(PL 11.735)。聖書では、Jにおいては供犠の犠牲用の動物を予定しているため、清い動物を七つがいつ、清くない動物を一つがいつとなしており、一方Pではモーセ以前の祭儀を認めないため、すべての生き物を一つがいつとなしている(Gen. 6.19, 7.2)。
4. 同様に、聖書では、墮落前のアダムとエバに対する「産めよ、増えよ」という言葉が、洪水後に再度ノアたちに対して与えられ(Gen. 1.28, 9.7)。これは虹の契約の直前で語られているのだが、これにより人類の再出発が意識され、神と人間との関係の結び直しが印象付けられる。一方PLでは「産めよ、増えよ」という表現は語られておらず、ミカエルの啓示の中で強調されているのは、「女の末裔から救い主が生まれる」という預言である(PL 12.327)。ここでも、関係の結び直しの起点がノアからアダムへと微妙に前倒しされている。
5. ミルトンは『教会統治の理由』(*The Reason of Church Government*, 1641)において、福音という至上の契約のもとでは、人は神と一体となり、神との交わり(“fellowship”)をもつことが望まれる、と語っている(CPW 1.837)。これは、新約における、神と御子の交わり(KJVでは“fellowship”)を人の間にも広げようという意図に通じる(1 John 1.3)。

引証資料

Allen, Don Cameron. *The Legend of Noah*. Urbana: U of Illinois P, 1963.

Ariosto, Ludovico. *Orlando Furioso*. Trans. Guido Waldman. Oxford: Oxford UP, 1983.

Hill, Christopher. *Milton and the English Revolution*. London: Faber and Faber, 1977.

Hooke, S. H. *Middle Eastern Mythology*. Harmondsworth: Penguin, 1963.

Milton, John. *Complete Prose Works of John Milton*. Ed. Don M. Wolfe. 8 vols. New Haven: Yale UP, 1953-82. (CPW と略記)

---. *Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. 2nd ed. London: Longman, 1998.

Prince, F. T. “On the Last Two Books of *Paradise Lost*.” Ed. C. A. Patrides. *Milton's Epic Poetry: Essays on Paradise Lost and Paradise Regained*. Harmondsworth: Penguin, 1967. 233-48.

ウェルギリウス著、泉井久之助訳『アエネーイス』第一巻、岩波文庫、1991。

大島力『旧約聖書と現代』NHK ライブラリー、日本放送協会、2000。

杉勇他訳『古代オリエント集』筑摩世界文学大系 1、筑摩書房、1978。

関根正雄訳『旧約聖書 イザヤ書』下巻、岩波文庫、1965。

関根正雄訳『旧約聖書 創世記』岩波文庫、1956。

武村早苗『ミルトン研究』リーベル出版、2003。

月本昭男訳『ギルガメシュ叙事詩』岩波書店、1996。

フォーサイス、ニール著、野呂有子監訳『古代悪魔学——サタンと闘争神話』法政大学出版局、2001。

フォン・ラート、ゲールハルト著、山我哲雄訳『ATD 旧約聖書註解』第一巻、ATD・NTD 聖書註解刊行会、1993。

フレイザー、J. G.著、江河徹他訳『旧約聖書のフォークロア』太陽社、1976。

ホメーロス著、呉茂一訳『イーリアス』第一巻、岩波文庫、1982。

ミルトン、ジョン著、平井正穂訳『失楽園』全二巻、岩波文庫、1981。

ミルトン、ジョン著、新井明、野呂有子訳『イングランド国民のための第一弁護論および第二弁護論』聖学院大学出版会、2003。

ヨセフス、フラウィウス著、秦剛平訳『ユダヤ古代誌』第一巻、ちくま学芸文庫、筑摩書房、1999。

編 集 委 員

岡本紀元・直野裕子・藤本隆康

平成20年3月31日 発行

発 行 所 甲南女子大学英文学会
神戸市東灘区森北町6丁目2-23
甲南女子大学英語英米文学科コモンルーム
TEL (078) 413-3124

編集代表

梅 原 大 輔
